

海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ③)

高島 敬明

前は、ノボロシースクでの3日目の朝が来てここでの生活がスタートしたところまででした。エンジニアリング会社のプロマネの生活指導の話に入る前に、まずノボロシースク市の紹介をしましょう。

1. ノボロシースク市とは

掲載1回目の地図にあるように黒海沿岸の町であり、主要港です。人口は約27万人(2016年)、面積は81平方キロの比較的小さな港町です。当市は、黒海艦隊の基地として1838年に建設されましたが、1722年以来その地を支配していたトルコに取って代わったのです。町の名前も「新しいロシアの町」の意味で命名されました。第二次世界大戦時にドイツ軍に占領されましたが、ソビエト軍の水兵の小部隊が225日間にわたり町の一部を死守したことによりノボロシースク市は「英雄都市」の称号を授けられました。

当市は、現在は産業都市であり、ロシアの海上貿易(黒海沿岸の都市ですが、ボスポラス海峡を通過して地中海に行くことが出来ます)に大きく貢献しています。多くの石灰岩を産出し、セメント工業が発達しています。前号で山並みが白く見える、と書きましたがこのためです。またロシアの主要なワインの産地の一つで、高品質のテーブルワインやスパークリングワインが造られています。記憶に留めたい都市ですね。

2. プロジェクトマネージャー(プロマネ)からの生活指導

さて娯楽室で、プロマネから生活する上で細部に亘る注意事項や留意すべき点の話がありました。要点をまとめると以下の通りですが、書いてみると改めて当時のソ連の国情が見て取れます。

・ × ・ × ・ × ・ × ・ × ・ × ・

●生活指導の要約

★『この地方は、西側の日本人にとっては入れないところで、港湾、空港はすべて国境とされているので警戒は厳重です。特に回教の国、イラン、トルコなどに地理的に近く宗教の問題は非常に敏感です。行動範囲も制限されていて国内でもパスポート所

持が義務付けられています。なお宿舎の責任者は最後まで高島さんをお願いしてあります。要望事項などすべて責任者を通じて上げてください』

★『ノボロシースク市は人口17万(当時)の比較的小さな都市ですが、小規模の海軍基地があります。また全国から集められた18～23歳の女学生約6千人の看護婦学校があります。一般人は勿論のことですが、特に看護婦学校の生徒とは決してトラブルを起こさないように願います』(クラスノダール地方は白人と黄色人種の接点であり、びっくりするような金髪の美人が多い)。

(なおソ連は性病が蔓延していて、万が一感染した場合は市民に感染する可能性から飛行機では帰してくれず、船に乗せて動物用のオリの中に隔離して日本に送還するそうです)。

★『事故や犯罪には、六つの組織が対応します。日本の通訳の解釈では、陸、海軍の憲兵・国境警備隊・縦の警察・横の警察・交通警察の六つの組織のことです』

縦と横が何を意味するのかわかりませんが、何か事件が起こり事情聴取のためどこかの施設に収容されたとしてもその場所がどこなのか日本領事館でも把握できず、ただ釈放を待っているしかないそうです。

★『国境都市のため工事以外で誤解されるような写真は絶対にとってはいけません。また軍事関係と思



工事現場事務所内部と通訳のBさん(窓際) (1978.4)



サブマネージャーのO氏(右)と測量確認。左は筆者(1978.6)

われるような場所には絶対に近づかないようにお願いします』

(軍隊、警備隊などの正門で記念写真を撮ればすぐ日本に強制送還されるそうです)。

★『この国ではアメリカ、西側との関係が良くないため、年配者、若い人すべてが英語教育は受けていません。その昔はロシアの宮廷文化はフランスに見習っていた関係で貴族間ではフランス語が話されていたようです。今でもフランスには大きな憧れを持っているそうです。その関係でフランス語を話すロシア人はたくさんいます』

(この点に関して私たちの通訳の説明をしますと、仕事において普段はロシア語と日本語を話せる通訳が1名付きます。しかしソ連海運省とフランスの下部工事業者と日本側との詳細打ち合わせでは、多いときにはロシア語⇄フランス語の通訳、フランス語⇄英語の通訳、英語⇄日本語の通訳、都合3名の通訳が付いたこともありました。当然時間はかかり、論点が分からなくなったこともあったようです)。

★『工事の進捗の段取りは、下部工事、橋脚部分はフランスの業者が担当、機器の運搬はソ連サイドの手配となります。日本側は、開梱作業からはじめ、溶接、保温、塗装工が順次現場に入ります』
(ソ連側の手続きや習慣に慣れなくて少し遅れ気味ですが心配するほどではありません)。

★『この国では「政治犯」と「経済犯」は最も重く処罰されます。市民は外国の品物が豊富でソ連に無い商品が買える「外貨ショップ」での買い物を切望しています。この場所には定められた外貨(ドル、円、マルク)を持っていなければ店に入ることが出来ません。特に市民はドルを欲しがります。外貨ショッ



ノボロシースク市内のフリーマーケット (1978.4)

プの品物は、高額で転売できるという旨味があるのです』

(当時、公称1米ドルが1ソ連ルーブルでしたが、市民間では、1ドルが3ルーブルで交換されていました。それでも前述のように旨味があるそうです。この通貨の交換も為替に関する重大犯罪とのことで嚴重に何度も注意されました)。

最後にソ連は、人種差別は皆無と言っていいほどありません。むしろ日本人は尊敬されています)。

・ × ・ × ・ × ・ × ・ × ・

と言って話が終わりました。

話が長々と続きましたが、やはり最高責任者として今回の仕事をやり遂げる上で心配事がたくさんあったようです。全員に対する説明が終わった後、私だけプロマネの部屋に通され、サブマネと3人のミーティングとなりました。そこで彼からは、「共産圏でのプロジェクトはわが社にとって初めてですが、今後の社運がかかっています。また責任者としてとにかく皆さんを無事に日本に連れて帰る使命があります。その意味で宿舎での寮生の管理を厳しくお願いします。高島さんも寮生の模範となるように努めてください。」との話がありました。プロマネ、サブマネともに経験豊富で仕事に精通され、紳士で使命感に燃えている立派な人でした。この二人なら私も、作業員も最後までついていけると感銘を受けました。共産圏の何も知らない国に来て不安なことがたくさんありましたが、それも一気に吹き飛んだ気持ちになりました。

次号は、日本から派遣されている我々の食事を作ってくださいの「(株)魚国」のcockのSさんのお話を中心に書いていくつもりです。

(続く)